

イエスを信じた人たちがの出会い、それぞれに違いますが、共通していることは、危機的な状況におかれた時、辛い時、苦しい時に助けてくれたということです。それがメシアとして受け入れられる一つのたいせつな要件となっているようです。

彼らは、①婚礼の場で客に振る舞うぶどう酒がなくなつた、②息子が瀕死の状態であつた、③38年間も池のほとりであつた足を癒やすために待ち続けていた男、④空腹だが何も食べるものがない大勢のひとたち、⑤嵐の湖上で沈みそうな舟に乗っている時、嵐を止ませて下さつた、⑥生まれつき目が見えない、そういう状況、状態におかれていたのでした。

そして今回は、ラザロの復活をとおして本人とそこに居合わせた人たちに救いをもたらすのです。(ところで今日のヨハネ福音書ではト書きのような部分が入入されているので、話の筋をわかりやすくするためにト書きを脚注のように別欄において読むとよいです。2・4・5・9b・10・13・16節)

さて、ラザロは「病人」です(1節)。ここで病を患つたのはただ身体だけではなく、彼の精神や霊(信仰)においても病に罹つたのです。なぜならヨハネ福音書のもこの言葉(ギリシア語では「身体が病気になる」と「信仰が弱る」は、おなじ言葉を使つたのです。

「信仰の弱い人(＝病のひと)を受け入れなさい。その考え

を批判してはなりません。(ローマの信徒への手紙14・1)「そして病は、いずれラザロを死に至らせるのです(14節)。

教会に連なる兄弟姉妹のうちの一ひとりが、病に罹り、次第に重篤化して、肉体も精神も信仰においてさえも命が死に至るかもしれない、そういう状況をヨハネは暗示しているのです。

1ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。3姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病氣なのです」と言わせた。6ラザロが病氣だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。

2このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐつた女である。その兄弟ラザロが病氣であつた。

その病の報せを受けてもイエスはヨルダン川の向こう(10・40)に留まっておられます。イエスの心中には、もう一度ユダヤ(エルサレム)に行かなければならないという使命があつたからです。ご自分を石で打ち殺そうとする人たちに、もう一度しっかりと向き合つて伝えるべきことがあるからです。弟子たちもイエスに従つていくだろうけれども、それは石打ちの刑に遭つかもしいない危険を伴うのです。その危険がイエスをして二日間決断を躊躇わせるのです。

信仰を貫くといふことは時に、世の生活との間に、激しく悶え苦しむほどの葛藤を引き起すことがあります。さまざまな誘惑、試練、危機が自分の行く手を遮ることがありま

す。またそれは、自分ひとりだけではなく仲間もおなじ危険に遭わせることになるのです。信仰における使命感が自分の命と引き換え、全生涯と引き換えにしても貫徹しなければならぬ使命ならば、とても容易に判断できることではないでしょう。

さらに、試練や危険は一つだけなら判断は易しいです。しかし二つ以上の問題が同時に襲つてくることもあります。この聖書箇所では、遠く離れた信仰における友人が重篤な病に罹つているという報せを受けています。二つ返事で即座に行つてあげることができない、それほど判断が難しい状況に直面する、心が膠着状態におかれて苦悶する時があります。

7それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」8弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」

いつもは判断力が冴えており、物事を即断する、竹を割るような性格の人がためらい優柔不断な姿をさらけ出すことがあります。第一の使命を差し置いて、やはり友人を選ぶ、判断が一転する、なぜならその病は放置しておければ、完全に関係が失われてしまうからです。

9イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。11ころお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」12弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう。」

と言った。14そこでイエスは、はつきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。15わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行くよう。」

最初にキリスト教会の歴史をまとめたエウセビオスという著作家が、その著書「教会史」の中に、「使徒ヨハネの物語」というタイトルの、次のように記述しています。

この頃、イエスの愛した使徒であり福音伝道者だったヨハネは、アジアでまだ生きており、その教会の監督をしていた。…

さらにクレメンス（150頃～215年頃の教父）という著作家が、ヨハネについて書き著わしたものを引用しています。

ある町に赴いたヨハネが、そこで出会ったひとりの若者を、長老に託して世話をするようにと委ねました。長老はその若者を引き取って世話をし、洗礼を施した。洗礼を施したので安心した長老は、彼の世話を辞めたのだが、その後、悪い若者たちが、その若者を食事に誘い、次第に盗みをする時にも誘うようになる。若者は、悪に染まっていき、しまいには強盗の首領になる。

時を経てヨハネが再びその町にやって来て、あの青年を返してほしいと言った。長老は「大きくため息をつき、涙を流して言った。『彼は死にました。』」とつぶやいて死んだのですか。原因は何ですか。「長老は答えた、「彼は神に対して死んでしまったのです」。

…中略…

ヨハネは、馬に飛び乗り強盗たちの土地に勇み行く。すぐさま捕らえられたが「おまえたちの首領のところへ連れて行け」と叫んだ。そこに武装してやって来た首領は、ヨハネであることを認めると、恥じて逃げ出した。年老いたヨハネは歳も忘れ全力で追いかけて叫んだ。「子よ。なぜ逃げるんだ。恐れないでくれ。おまえにはまだ命の希望がある。わたしはおまえのためにキリストに執り成そう。必要なら、おまえのために死のう。主がわたしたちのためにそうしたように。…わたしはおまえのためにわたしの魂を与えよう。止まって信じなさい。わたしを遣わしたのはキリストなのだ」。

それを聞いた彼は、立ち止まりうつむき、武器を投げ出した。そして震え、激しく泣き出した。年老いたヨハネが近づくと彼は抱擁し、釈明した。彼は涙で二度目の洗礼を受けた。…こうしてヨハネは真の悔い改めの偉大な範例や、再生の大きなしるし、目に見る復活の記念碑を与えたのである。

『教会史』 III 23 エウセビオス／秦剛平訳

イエスをキリスト（メシア）であると言っている人たちは、イエスの奇跡によって、ただ苦境、困窮から救われただけではない、彼らは、イエスの奇跡によって、神がいかなる方であるかを知ったのです。つまり神は愛である（1ヨハ1:4）。